

1. 題名、調査地、調査者

題名： 可能性としてのハイパー・モビリティ：生存基盤持続型社会の潜在力の表現としての人の移動に関する広域研究・序説

調査地： フィリピン

調査者： 石橋誠、小張順弘、渡辺暁子、細田尚美、シンシア・ネリ・ザヤス、ネストール・T・カストロ

2. 研究目的

今日の人の動きが量的・質的に顕著で重要となっている「ハイパー・モバイル社会」の中で、生存基盤の持続・拡大に移動を不可欠のものとして組み込んだ社会の研究は、東南アジア各地で顕著に観察される向都移動傾向にも着目する必要性が認識される。細田は、フィリピンのサマル島での事例を取り上げ、マニラへの向都移動を、外部への「幸運探し」と母コミュニティでの外部で得られた「幸運の分配」という互酬的社会関係に着目し、生存基盤の維持・拡大のための手段として移動を文化面から捉える「サパララン・モデル」を提示した。一言語民族集団の向都移動事象の事例を対象としたモデルの限定性が存在するものの、生活基盤の確保に伴う移動を文化的側面から捉える視点の重要性を指摘した。

本研究では、このモデルを手がかりとし、フィリピンにおける異なる諸条件を持つと考えられる民族言語集団を取り上げ、移動に伴う文化的側面についての実態把握、比較検討による具体的な類似点・相違点の考察を行うこと、そして、国内外において移動性が高いとされるフィリピンの国情を背景とした「ハイパー・モバイル社会」のもつ生存基盤持続型社会としての可能性と人の移動が備える潜在力についての今後の研究に向けた概念整理、理論的な作業仮説の提起することを目的とした。

3. 研究の内容と成果(得られた知見の概要)

具体的な比較作業として、以下5つの民族言語集団(「各集団の概観」)における(1)移動への志向性、(2)生業の安定性、(3)移動による生存基盤維の維持・拡大、(4)母コミュニティへの帰属意識、(5)移動先におけるシンボルの創出(土地への意味づけの過程)、(6)互酬性的関係のある集団の性格・規模、の6項目について検討を行い、移動に伴う理論的な作業仮説の整理を行った。

各集団の概観

言語集団	人口(万)	本来の居住地	宗教	生業
ワライ	310	サマル島・レイテ島北部	キリスト教	小規模農業
ブトゥアノン	142	北部ミンダナオ島	キリスト教	半農半漁
マラナオ	115	中央部ミンダナオ島	イスラーム	農耕
タウスグ	102	スールー諸島	イスラーム	交易
ボントック族	4	北部ルソン島	精霊崇拜	水稻耕作

各項目の比較において(以下、上記項目順に記載)、(1)地縁的な村を基盤とするポントック族を除いた各集団の移動への志向性の存在、(2)相対的に不確実性を孕む生業(比較的安定した水稲耕作を行うポントク族、劣悪化した生態環境下で市場経済とリンクした生業に従事するブトゥアノン)、(3)ワライとブトゥアノンにおける生存基盤の持続に移動が果たす大きな役割、(4)マラナオとポントック族の強い帰属意識とワライとブトゥアノンの比較的弱い帰属意識、(5)ポントック族を除く各集団に共通するシンボル創り、(6)地縁を中心としたポントック族、血縁関係を軸とするマラナオにおける強い互酬的関係の存在、が観察された。

「サパララン・モデル」構築事例であるワライとの比較から、各集団の向都移動の共通性を確認する分析モデルとして一定の妥当性、説明力を持つと判断された一方で、「幸運探し」では、ブトゥアノンの生業の不安定性による移動、タウスグの紛争などによる強制的移動、「幸運の分配」では、マラナオのモスクの建設や儀礼・饗応というイスラーム的発現形態、ポントック族の移住者と母コミュニティ住人との互酬的社会活動の活性化という各集団の特質も確認された。

以上の比較考察の結果から、互酬的関係をもつ集団の性格や規模は移住者の母コミュニティへの帰属意識と相関関係にあり、移動パターンをも規定するのではないかと、そして一般的に土地との関係が希薄であるとされてきたネットワーク型社会の移住者たちが、新たな移住先の土地に対して意味付け(シンボル創り)を行っているのではないかという見通しが得られた。移動性の高い社会でも、人々は、何らかの所属や帰属意識を求める傾向が認められ、今後は移動を促す文化的価値観や社会構造についてより精緻な研究、そして都市移住過程における移住者がもつ柔軟性、戦術・戦略などに着目した研究などを進める必要性を確認した。

4. 成果発表の具体的な予定(投稿予定の学術雑誌の書名等)

研究成果は、*Kyoto Working Papers on Area Studies* にて発表後、移民研究や東南アジア研究の国際ジャーナルに投稿する予定。



写真 1

マニラ湾の埋立地に住民の手で建てられたモスク（撮影：渡邊暁子）



写真 2

バギオに住むボントク族の結婚式：キリスト教式であるが、衣装など、さまざまな民族的要素が見られる。結婚式の後、新郎はアメリカへ、新婦の父はマレーシアへと出稼ぎに行った。（撮影：石橋誠）